

暗唱のすすめ へ近代文学編⑦ へ

風立ちぬ

堀辰雄



それらの夏の日々、一面に薄の生ひ茂つた草原
の中で、お前が立つたまま熱心に絵を描いてゐる
と、私はいつもその傍らの一本の白樺の木陰に身
を横たへていたものだつた。さうして夕方になつ
て、お前が仕事をすませて私のそばへ来ると、そ
れからしばらく私達は肩に手をかけ合つたまま、
遙か彼方の、縁だけ茜色を帯びた入道雲のおくお
くした塊りに覆はれてゐる地平線の方を眺めやつ
てみたものだつた。やうやく暮れやうとしかけて
ゐるその地平線から、反対に何物かが生れて来つ
つあるかのやうに。